

第16図 昭和58年度 平城京内発掘調査地一覧

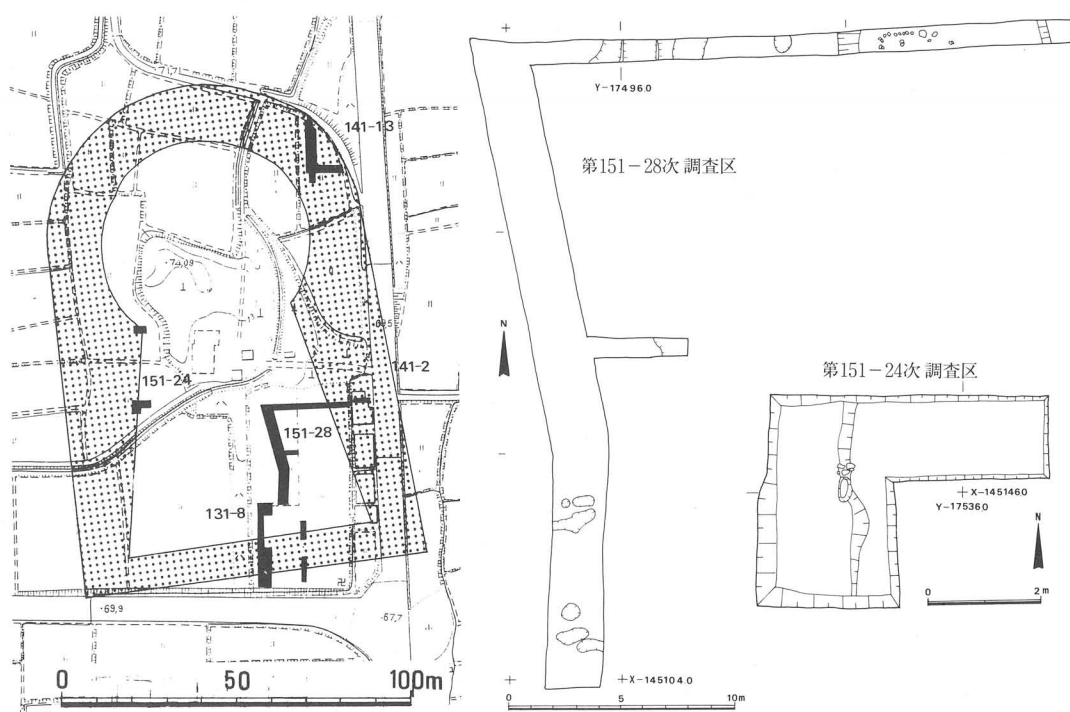
昭和58年度平城京内発掘調査地一覧

次 数	調 査 地 区		面積㎡	調 査 期 間	備 考	担 当 者
第151-2次	左京一条二坊十六坪	法華寺町 1080	33	'83.4.18 - 4.21	塚本奈良次郎	本中 真
-15次	左京一条二坊	" 946. 947	180	'83.9.10 - 9.19	"	岩永 省三
-19次	左京一条二坊	法華寺北町 933	10	'83.10.27	東口正継	毛利光俊彦
※ -21次	左京一条二坊十四坪	" 1115	6	'83.11.4	内山佐一郎	"
-24次	左京一条二坊十五坪	法華寺字小鍋尻 ¹⁰⁹⁹⁻² / ₁₁₁₀₋₂	21	'83.11.21 - 11.24	法華寺墓地	森 郁夫
-28次	左京一条二・三坊	法華寺 1132 他	100	'84.1.9 - 1.12	"	山本 忠尚
※ -11次	左京二条二坊十三坪	法華寺町 263, 259	1,750	'83.8.18 - 10.21	(株) シャロン	山崎 信二
※ -13次	左京二条二坊十五坪	" 398	14	'83.8.24 - 8.29	杉本繁次郎	"
-18次	左京三条四坊四坪	大宮町 3丁目 204	105	'83.10.19 - 10.27	高橋治一	橋本 義則
※ -32次	左京三条二坊三坪	三条大路一丁目 594 他	932	'84.2.27 - 3.27	(株) 東鮎	佐藤 信
※ -1次	左京四条二坊一坪	四条大路 1 - 808 - 1	650	'83.3.30 - 5.23	(株) 植田商事	上野 邦一
-29次	左京四条一坊十四坪	四条大路 2 - 17 - 4	30	'84.1.17 - 1.18	木村義一	山本 忠尚
※ -30次	左京九条四坊	東九条町字金池, 北庄町字九坪	134	'84.2.4 - 2.16	奈良市都市計画課	"
※ -6次	右京一条北辺四坊三坪	西大寺宝ヶ丘町 ⁷⁴⁴ / ₇₄₅	23	'83.6.22 - 6.23	定森正視	本中 真
-26次	" " 六坪	" " 7-30	1,340	'83.12.1 - '84.3.1	防衛施設庁	杉山 洋
-33次	右京一条二坊六・十一坪	西大寺栄町 2314 - 1	40	'84.3.12 - 3.13	紙谷昭義	山本 忠尚
-17次	右京二条西三坊大路	菅原町字塚尾 378 - 1	50	'83.10.11 - 10.19	(株) 英和	杉山 洋
-22次	右京二条二坊十六坪	西大寺国見町 1 - 7	391	'83.11.9 - 12.2	社会保険センター	"
※ 第149次	右京八条一坊十一坪	大和郡山市九条町	3,000	'83.4.11 - 6.30	郡山市焼却場	巽 淳一郎
第125-4次	右京九条大路	大和郡山市観音寺町	126	'83.7.7 - 7.27	県道城廻り線	山崎 信二
第151-16次	法華寺境内	法華寺町	80	'83.10.3 - 10.14	(宗) 法華寺	亀井 伸雄
※ -4次	東大寺北面大垣	雑司西町 112	18	'83.6.1 - 6.2	横田清子	松村 恵司
次数外	春日大社境内	春日野町 160	204	'83.10.5 - 10.17	(宗) 春日大社	森 郁夫
※第151-12次	西大寺境内	西大寺小坊町 320	33	'83.8.17 - 8.20	岡本岩雄	山崎 信二
-25次	"	西大寺芝町 1 - 2578	54	'83.11.28 - 12.1	(宗) 西大寺	亀井 伸雄
次数外	薬師寺境内	西の京町字寺内 ²⁶¹ / ₂₆₂	198	'83.5.24 - 6.2	(宗) 薬師寺	千田 剛道
"	"	" " 224 他	1,960	'83.12.12 - '84.2.8	"	山岸 常人
※ "	法隆寺境内	斑鳩町法隆寺	1,941	'83.4. - '84.3.	防災関連調査等	

※は未収録、未収録は巻末参照

1 左京一条二坊・三坊(木取山古墳)の調査 第151-24・28次

本調査は、共同墓地拡張(第151-24次)と資材置場建設(第151-28次)のための事前調査である。第151-24次調査地は木取山古墳墳丘西辺推定地にあたる。南北2ヶ所に設定したトレンチのうち、南トレンチ西寄りでは地山が西方になだらかに下降し、その直上から埴輪片が出土する。この地点が墳丘前方部西辺の可能性はある。北トレンチは耕作土直下約15cmで平坦な地山となる。第151-28次調査地は、墳丘東辺推定地であり、逆L字形に設定したトレンチの西端部で、幅約10mの南北溝を検出した。底に若干の小礫があり、古墳周濠の可能性はある。しかし、今回の調査で検出した東西両地点の地山の下がり方を木取山古墳前方部の東西両端に想定すると、復原形は前回(昭和56年度、第131-8次)よりも前方部が幅広いものとなる。但し、検出した部分はいずれも底に近い部分であり、実際にはやや狭い形となるだろう。

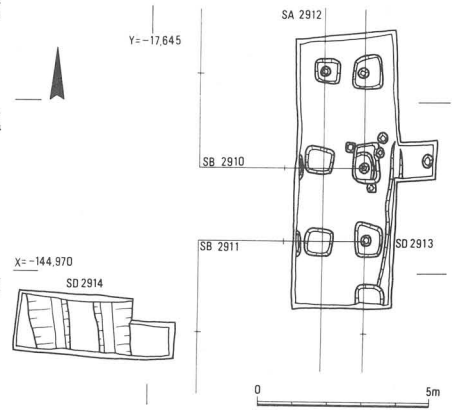


第17図 木取山古墳発掘遺構図

2 左京一条二坊内の調査 第151-2・15・19次

昭和58年度には表記条坊内で木取山古墳関係の調査以外に3箇所の発掘調査を行った。法華寺および海龍王寺旧境内の北方に位置し、いずれも法華寺集落内における住宅の新改築に伴う、小面積の調査である。

第151-2次調査は、左京一条二坊十六坪西端及び九・十六坪坪境小路の想定地にあたる。現地表下約50cmで厚さ約10cmの奈良時代の整地層があり、この面で南北塀1条、南北棟2棟、南北溝2条を検出した。このうちSD 2914は、幅約3m、深さ約1.0mの南北溝で、平城宮跡第86次調査で検出した東二坊坊間小路東側溝の、朱雀大路の振れ（国土方眼方位に対し $N0^{\circ}15'41''W$ ）を考慮した北の延長線上より、さらに東へ約9mずれている。従って今回の調査では、この溝を九・十六坪坪境小路東側溝と断定することはできなかった。



第18図 第151-2次発掘遺構図

第151-15次調査は海龍王寺旧境内の北側にあたる。第82-11次調査で当該地の東隣を調査し、大規模な掘立柱建物2棟、掘立柱列3条を検出しており、その一部が当該地に及ぶと想定される。南北約25m、東西約5.5mの調査区を設定した。

層序は旧耕土・旧床土の下に厚さ約20cmの近世の遺物包含層があり、現地表下約50cmでバラス混り明黄褐色粘質土の地山に達す。遺構は地山上面で検出した。検出したおもな遺構は、掘立柱建物1、溝1である。調査区南半部は近世の大きな土壌が多数密集しており、奈良時代の遺構の遺存状況は良くない。

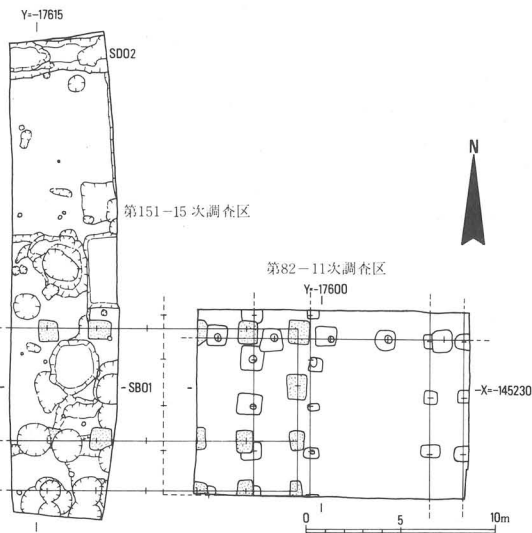
SB 01は掘立柱の東西棟建物で、第82-11次調査の検出分と合わせ6間以上×3間で南に廂が付く。桁行約2.7m（9尺）等間、梁行は身舎約3m（10尺）等間、廂の出は約2.7m（9尺）である。調査区を拡張できず西妻は未確認である。SD 02は素掘りの東西溝で、幅約2m、深さ約0.3mである。大きく2層に分れ、

下層から鎌倉時代の軒平瓦1点、上層から石造五輪塔1点が出土した。

遺物はSD 02から出土したもの以外は、近世の土壌・遺物包含層から出土した。軒瓦16点、丸・平瓦、土器類があり、奈良時代のもは軒瓦10点である。このうち

6679 A型式は法華寺・海龍王寺に同範品があり他は平城宮に同範品がある。

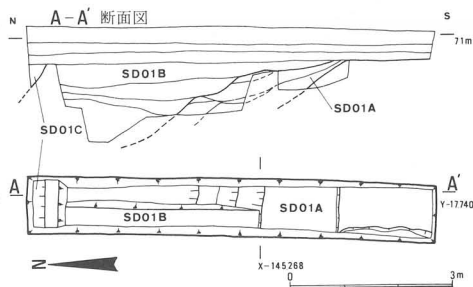
調査の結果、第82—11次調査で検出した遺構のうち当調査区に及ぶものはSB 01のみであることが判明した。今回の調査および第82—11次調査で検出した遺構は、いずれも規模が大きく3時期以上の変遷が認められるが、発掘面積が狭く、建物の配置状況を解明するには至っていない。



第19図 第151—15次発掘遺構図

第151—19次調査は、一条条間路推定地にあたる。3条の重複する東西溝を検出したが、発掘面積が狭く、溝底や溝北岸を確認することができなかった。また年代の決め手になる遺物も出土していない。

SD 01 Cは最も新しい溝で、幅0.3 m以上。この下層のSD 01 Bは幅5 m以上、深さ1.5 m以上で、底近くには灰黒色粘質土が厚く堆積する。最下層のSD 01 Aは幅3.2 m以上、深さ1 m以上で、上から第3層目の底に木炭を混じえた炭化物が厚さ5 cmほど堆積し、以下はバラスを含む灰褐色ないし黄灰色砂質土となる。これらの溝のうちSD 01 Cは、東方約200 mの第95—2次調査で検出した海龍王寺北辺を限る東西溝SD 1150と位置が一致する。ただし、これが一条条間路の側溝か否かについてはなお検討を要する。SD 01 A・Bは東方約100 mで実施した第82—8次調査の知見から、奈良時代以前に存在した湿地の南岸である可能性がある。



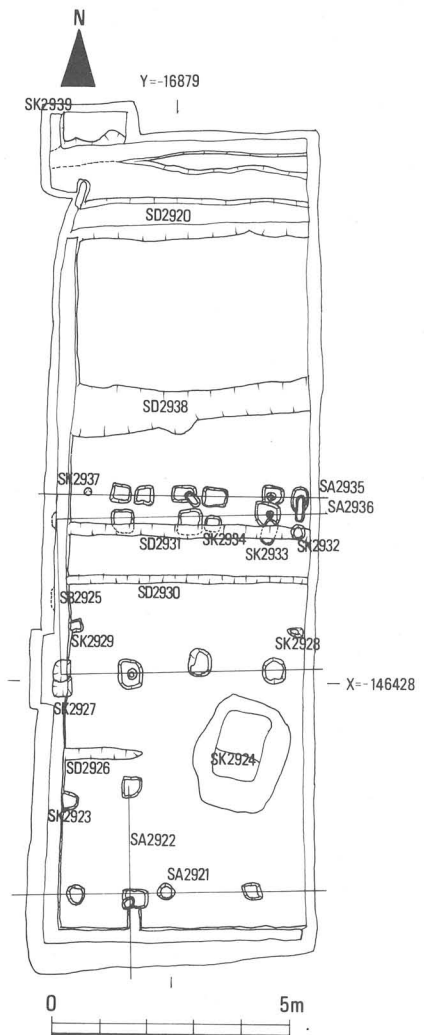
第20図 第151—19次発掘遺構図

3 左京三条四坊四坪の調査 第151—18次

本調査はマンション建設に先立つ事前調査である。先年（第138次調査）本調査地の北西で現道路敷を狭んで接する位置において三坪の南辺を調査したが、三・四坪坪境小路を検出するには至らなかった。今回は三・四坪坪境小路とそれに伴う側溝の検出及び四坪内の状況の一端を明らかにすることを目的とした。主な検出遺構は掘立柱建物1棟・掘立柱塀4条・東西溝1条等である。中世の多数の耕作溝を客土・耕土・床土下の黄灰褐色及び黄茶褐色の二層の砂質土面で、又奈良時代の遺構はその下の青灰色粘質土面で検出した。

掘立柱建物SB 2925は桁行3間以上、梁行2間の東西棟で、柱間寸法は桁行5尺、梁行5.5尺。掘立柱塀SA 2935・2936はいずれも柱間寸法の一定しない東西塀で、2間分を検出するに止ったが、柱筋が一致すること等からSB 2925より古い同一の塀の建て替えと考えられる。SA 2922は柱間寸法8尺の南北塀で1間分を検出した。SA 2921は柱間寸法6尺の東西塀で2間分を検出した。東西溝SD 2920は幅1.5m、深さ0.6mの素掘りで、三・四坪の坪境小路南側溝に当たると思われる。

SA 2936の柱掘形・抜き取り及びSD 2920の埋土から奈良中頃以降の土器が出土したことから、今回検出した遺構は奈良時代後半に属すると考えられる。なお出土遺物には奈良時代中期以降の製塩土器片が多数出土していることが注目される。



第21図 左京三条四坊四坪発掘遺構図

4 左京四条一坊十四坪の調査 第 151 - 29 次

事務所兼住宅の新築に伴う事前調査である。左京四条一坊十四坪の東辺部にあたり、東一坊大路西側溝の存在が予測されたため、南北 3 m × 東西 11 m の範囲で調査を実施した。期間は昭和 59 年 1 月 17・18 日の 2 日間である。盛土が極めて厚いため、重機により床土までを排土、その後人力で発掘したが、遺構検出面での南北幅は 1.5 m であった。東端で黄褐色粘質土の地山を検出、西へ向ってだらだらと下り、調査区西端近くで心もち上昇する。幅広の南北溝と判断した。埋土は灰色の砂まじり粘質土で、瓦器片を少々含む。東一坊大路西側溝の位置を踏襲した中世の溝と考えられる。

5 右京一条二坊十一坪の調査 第 151 - 33 次

商業ビル建設に伴う事前調査で第 142 次（昭和 57 年度実施）の補足調査としておこなった。期間は昭和 59 年 3 月 12・13 日の 2 日間、面積は東西 11.1 m × 南北 3.5 m の 39 m² 足らずである。調査の眼目は、一条二坊の坊間路西側溝確認にあった。というのは、今回のすぐ東でおこなった第 142 次調査において坊間路東側溝 SD 811 を検出し、これについては疑問の余地がないと判断したのだが、西側溝と推定した SD 812 については（両溝間の心心距離は 8.6 m と 3 丈に近似する）ごく一部を検出したのみで、西側溝とは確定できず、さらに西方、側溝間距離 4 丈以上となる可能性も否定できなかったからである。

調査の結果、砂質土の地山面においては十数個の小さな土壌状窪み以外何も検出されず、SD 812 が西側溝である蓋然性が高まった。

6 右京一条北辺四坊六坪の調査 第151—26次

防衛庁の宿舎改築に伴う事前調査で、12月1日から幅3m、延長70mの東西トレンチを設け予備調査を行い、奈良時代に属する遺構を検出した。このため12月15日から調査区を拡大して本調査を行った。調査面積は3箇所計1340㎡である。

当該地は、右京一条北辺四坊六坪の中央西寄りに位置し、東南は史跡「西大寺境内」の一部で「称徳天皇御山荘伝承地」に当たり、池と中島が現存している。周辺における既往の調査によって、池は奈良時代に存在したことが明らかになっており、今回の調査地を含む池の周辺には、池に付随した奈良時代の遺構が存在することが予想された。調査地は西から東へ伸びる低い丘陵の南斜面にあたり、現在池がある地点から中央調査区南東部にかけて谷がはいり込む。このため奈良時代に大規模な2回の整地を行っており、土層は上から表土、灰黄褐色砂質土（第2次整地）、淡黄褐色砂質土（第1次整地）、赤褐色礫まじり粘質土（地山）の順となっている。遺構は各整地層上面から掘り込まれているが、下層遺構については、断ち割り調査によってごく一部を検出したのみである。

遺構 主な遺構は掘立柱建物14棟、溝4条、井戸1基などである。これらの遺構は大きくI期～V期の5時期にわけることができ、II、III、Vの各期はさらに2小期に細分される。

I期 I期の遺構は第1次整地層上で検出したSD1015、SX1065である。SD1015は幅30cm、深さ10cmの素掘り溝で、埋土中に炭化物を含む。SX1065は長さ1.0m、幅0.7mの隅丸長方形の土壇で、側壁が赤褐色に焼けており、底面にはうすい炭化物の層が認められた。

II期 II期以降V期までの遺構は、第2次整地層上で検出した。II期はSB1000・1080・1090の3棟の掘立柱建物で構成される。SB1000は桁行9間、梁行2間で10尺等間の東西棟建物。この時期には廂は付設されていない。SD1005・1010はSB1000の雨落溝である。SD1010はSB1000の東妻に添って南へ曲がり、SD1005と東南部で合流するようである。SB1080とSB

1090 は、南北に並び側柱筋をそろえる。同位置、同規模で建て替えが行われており、SB 1080は掘立柱建物から、一部掘形に瓦を敷き込んだ地業をもつ南北棟建物に、SB 1090は大形掘形の建物から小形掘形の建物へとそれぞれ建て替えられる。SB 1000もSB 1080とSB 1090の建て替えに伴って西妻柱の一部に改作が行われる。

Ⅲ期 Ⅲ期にはSB 1000はそのまま存続し、その西方で2回の建て替えが行われる。Ⅲa期にはSB 1080・1090が廃絶しSB 1095が建てられる。SB 1095は桁行6間以上、梁行2間の身舎の東に廂が付く掘立柱建物。柱間寸法は桁行10尺、梁行5.5尺、廂の出6尺。Ⅲb期にはSB 1095がSB 1105に建て替えられる。SB 1105は桁行5間、梁行2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行7尺、梁行6尺。北1間分が間仕切によって仕切られる。

Ⅳ期 Ⅳ期はこの地域が最も整備される時期である。SB 1000は南側に廂が付設される(廂の出13尺)。その西方ではSA 1060、SB 1070・1085・1100が建てられる。SA 1060は柱間10尺の南北塀でSB 1100と柱筋をそろえる。SB 1070は、桁行2間、梁行2間の身舎の四面に廂の付く建物。身舎桁行8尺、梁行6尺で、廂の出は桁行方向8尺、梁行方向7尺。SB 1100は桁行6間以上、梁行2間の身舎の東に廂の付く南北棟掘立柱建物。柱間は桁行10尺、梁行9尺、廂の出8尺。身舎は棟通りに床束を持つ床張りの建物である。SB 1085は柱穴4個所を検出したにすぎず、構造は不明であるが、SB 1100と東西方向の柱筋をそろえており、SB 1100と有機的な関連をもった建物と言える。

Ⅴ期 この時期には大形の掘立柱建物が姿を消すとともに、この地域の性格が大きく変化する。2小期に細分される。Ⅴa期にはSB 1020・1055・1115が属する。SB 1020はSB 1000の廃絶後に建てられる。桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物。SB 1055・1115は小形の南北棟掘立柱建物。いずれの建物もⅣ期以前のような規格性を失う。Ⅴb期はこの地域が墓地として使用される時期である。SX 1074・1075、SD 1110が主な遺構である。SX 1074は須恵器の大甕を隅丸方形の墓壇に据えた火葬墓で、甕内には炭化物がつまっていた。ただし大

部分が削平されており、甕自体が蔵骨器となるか外容器となるのかは不明である。SX 1075 は灰釉陶器の壺を用いた火葬墓。まず一辺約 1 m、深さ 30 cm 以上の方形の墓壇を掘り、底に厚さ 10 cm ほどに細かい木炭を敷き、木箱に入れた壺を置く。さらにそのまわりに、やや大きめの木炭をつめ土をかぶせている。墓壇の周囲には柱間 5 尺の柱 4 本が立つ。覆屋もしくは結界のための柵であろう。

SX 1074・1075 にはいずれも副葬品はない。SD 1110 は断面 U 字形の素掘り溝。東で北へ曲がり、北西部の未調査区にこの溝と関連する何らかの遺構の存在が推定される。

SB 1030・1040・1045・1050 については、建物規模、所属時期が不明である。小形の掘立柱建物で、方位が振れるものもあることから V 期に含めることができる。

SE 1025 は崩壊の危険があったため、検出面から 2.5 m 掘り下げたが底まで完掘することができなかった。井戸枠は残っていない。西調査区の SD 1120 は素掘りの南北溝で幅 4 m、深さ 0.5 m である。周辺の遺存地割等から見て六坪と七坪の坪境小路の東側溝となる可能性がある。

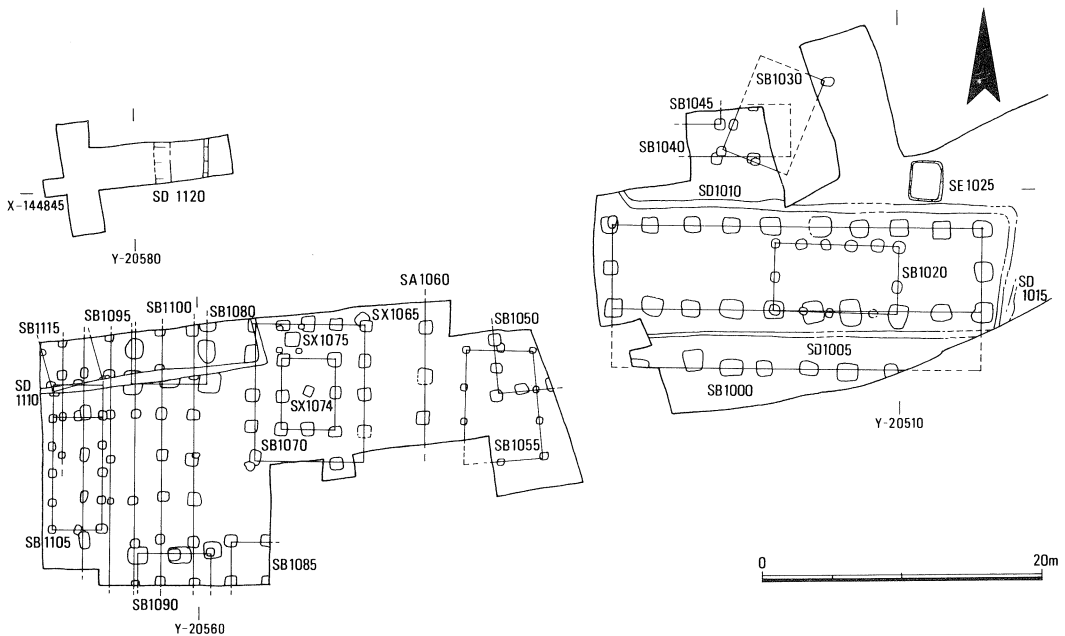
遺物 出土量は少ない。土器は第 2 次整地層中から、奈良時代前半のものが若干出土した。瓦は SD 1010・1110、および SB 1080 の版築層中から出土した。出土した軒瓦はいずれも奈良時代後半に属するものである。火葬墓 SX 1075 の灰釉壺は球形の胴部に、やや外傾する短い口頸部のつく葉壺形で、宝珠形撮の付く蓋を伴う。9 世紀前半のものである。

まとめ 遺構の年代については、直接的に時期を確定する資料にとぼしいが、(1) 第 2 次整地土中に奈良時代前半の土器が含まれる。(2) II 期の SB 1000 の北雨落溝 SD 1010 と SB 1080 の版築層中から奈良時代後半に属する軒瓦が出土している。(3) SD 1110 から(2)で出土した軒瓦と同型式の軒瓦が出土している。以上から第 2 次整地層上に造営された II 期～IV 期の遺構は奈良時代後半の比較的短い期間に次々と建て替えられたものと考えられる。I 期はその上を奈良時代前半の土器を含む第 2 次整地層が覆っているところから、奈良時代の初頭におく

ことができる。Ⅴ期については、SX 1075 出土の蔵骨器が 9 世紀前半のものであるところから、平安時代の初頭と考えることができる。

奈良時代後半のⅡ期～Ⅳ期の建物群は大形の掘立柱建物を含む計画的な配置を示しており、京内における一般的な宅地の建物構成と大きく異なっている。さらにこれらの建物群は、奈良時代後半に次々と建て替えられたものである。調査地南東に接する池を称徳天皇御山荘地の一部とする記録は中世初期までしか溯らないが、以上に述べたような遺構の時期や構成からみて、Ⅱ期～Ⅳ期の遺構は称徳天皇山荘跡の可能性を考えることができる。またSD 1120の検出によって、北辺坊推定地においても条坊制が施行されていたことが明らかとなった。

平安時代にはいと、この地は葬地となり火葬墓が営まれる。火葬墓は複数が群をなす場合が多く、SX 1075の北方やSD 1110で区画される北西部に関連した遺構の存在が予想される。



第22図 右京一条北辺四坊六坪発掘遺構図

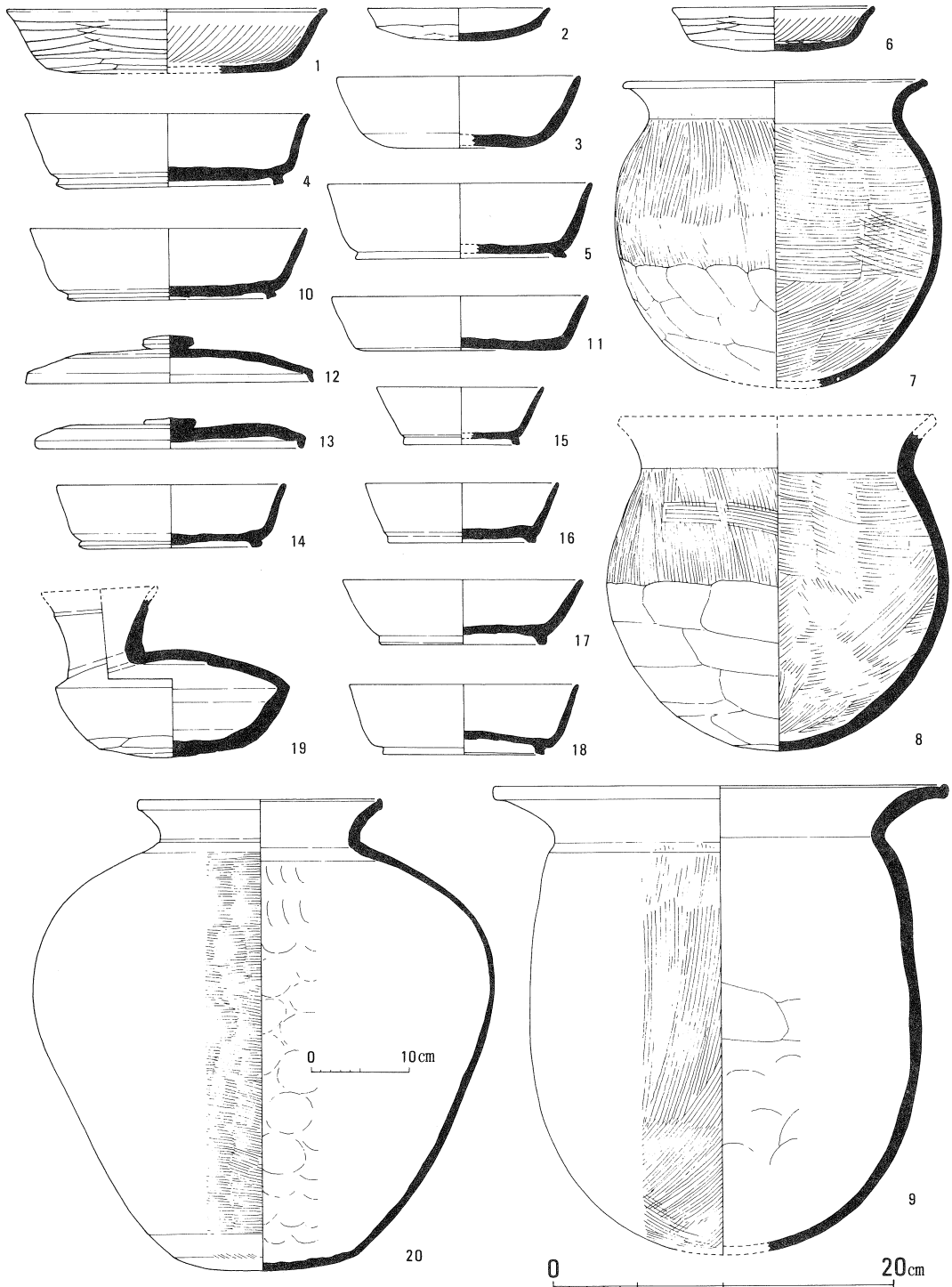
7 右京二条二坊十六坪の調査 第 151 - 22 次

社会保険センター建設に伴う事前調査である。調査地は平城京右京二条二坊十六坪の中央南寄りに当たる。同一坪の東北部では、昭和56年12月に当調査部が発掘調査を行い、小形の掘立柱建物群を中心とする奈良時代の遺構を検出している。（『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』昭和56年）

遺構 遺構は全体に後世の耕作などによる削平を受けており残りは良くない。さらに現在は調査地南西を流れている秋篠川の支流が、A調査区南半部をえぐり取っており、この部分には粘土と粗砂の互層が厚く堆積している。調査地の層序は、上から盛土、耕土、灰色砂質土(床土)、灰褐色粘質土(整地土)、黄灰褐色砂質土(地山)の順となる。検出した遺構は、灰褐色粘質土と黄灰褐色砂質土の上面から掘り込まれている。おもな遺構は、掘立柱建物11棟、溝6条、土壇6基などである。これらは遺構面の違いや切り合い関係から4期に分けることができる。

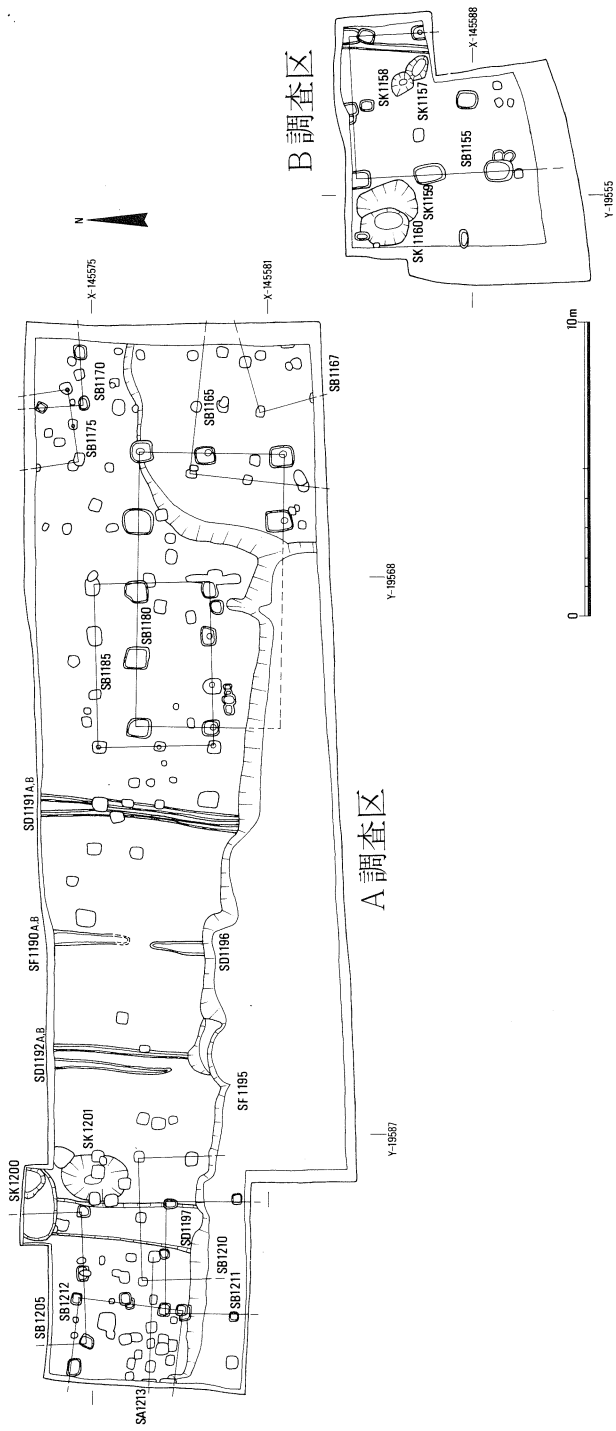
I 期 黄灰褐色砂質土上面に掘り込まれる。掘立柱建物SB 1155、1185、柵SA 1213、道路状遺構SF 1195、溝SD 1196・1197がI期に属する。SB 1155は桁行3間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物。8尺等間。SB 1185は桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行6尺、梁行6.5尺。SA 1213は柱間5尺等間の東西柵。SF 1195は、SD 1196・1197によって画される南北方向の道路状遺構。幅約9.7m(3.3尺)。SD 1196は幅0.4m、SD 1197は幅1.2m、いずれも深さ約10cmの素掘り溝である。SF 1195の中心は、周辺の調査結果から導いた十六坪を東西に二等分する線にほぼ一致する。昭和56年に行った十六坪北東部の調査では、この時期に坪内を南北に二等分する道路状遺構SF 0529が検出されており、今回検出のSF 1195とあわせて十六坪は四分割されていたと考えられる。

II 期 掘立柱建物SB 1180・1211、道路状遺構SF 1190 A、溝SD 1191 A・1192 A、土壇SK 1157・1158・1159・1160・1200・1201がII期に属する。SB 1180は桁行4間、梁行2間の東西棟掘立柱建物。8尺等間。坪内を東西に二分割する道路状遺構は、東へ4.5mほど移動する。SF 1190 Aの中心は条坊計画



第23図 土壙・溝出土土器

SK 1158 (1~5), SK 1159 (6~9), SK 1160 (10)
 SK 1200 (11~18), SD 1197 (19), SK 1201 (20)



第24図 右京二条二坊十六坪発掘遺構図

線から大路幅を80尺、小路幅を20尺とした値を引いた実際の坪の大きさの二等分線にはほぼ一致する。両側溝 SD 1191A・1192A はいずれも幅20～30 cm 深さ約10 cm の素掘り溝。この時期には多くの土壌が掘削される。SK 1200は2段に掘り込まれた土壌。南半部を検出したにとどまる。2段目の掘形から木片が出土しており、井戸の可能性もある。この中から須恵器、土師器、瓦の他に、長方形埴1点、鬼瓦片1点、墨書土器、製塩土器など多量の遺物が出土した。SK 1159・1160・1201は平面楕円形のすりばち状土壌。SK 1159からは土師器の甕が、SK 1201からは須恵器の甕が出土した。

Ⅲ期 Ⅲ期とⅣ期の遺構は、灰褐色粘質土上面に掘り込まれる。掘立柱建物SB 1170・1205・1210、道路状遺構SF 1190B、溝SD 1191B・1192B がⅢ期に属する。掘立柱建物はいずれも梁行2間の小規模な南北棟掘立柱建物。柱間はSB 1170が6尺等間。SB 1205が梁行7尺。SB 1210が桁行7尺、梁行6尺。坪内を東西に二分割する地割はこの時期まで踏襲される。道路状遺構SF 1190Bは両側溝が新しく掘削されるものの、Ⅱ期とほぼ同じ位置にある。

Ⅳ期 この時期には建物規模がさらに小さくなり、方位も東西に大きく振れている。方位の違いによって2小期に分けることができる。Ⅳa期には方位が北で西にずれる南北棟掘立柱建物SB 1167・1175が属する。柱間はSB 1167が6尺等間。SB 1175が桁行5尺、梁行4尺。Ⅳb期には方位が北で東にずれる東西棟掘立柱建物SB 1165・1212が属する。いずれも桁行4尺、梁行3尺である。SB 1212は同位置・同規模で建て替えが行われる。

各時期の年代は、土壌との切り合い関係や、柱掘形、抜き取り穴から出土した土器などを根拠に、Ⅰ期 奈良時代初頭、Ⅱ期 奈良時代前半、Ⅲ期・Ⅳ期 奈良時代後半とすることができる。

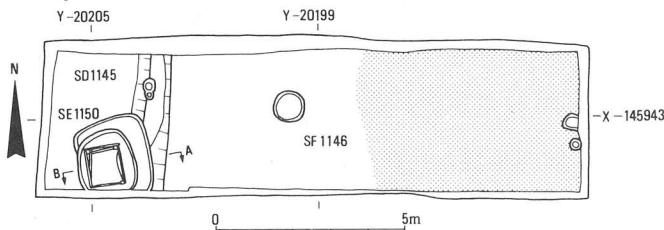
遺物 Ⅱ期の土壌SK 1159・1160・1200・1201や、調査区西端の柱穴群から多くの土器が出土した。全体に平城宮土器編年Ⅰ期からⅢ期にかけての土器が多く、奈良時代後半の土器は少量である。瓦類は少なく、わずかにSK 1200から丸瓦、平瓦と長方形埴、鬼瓦片が出土したのみである。

8 右京二条西三坊大路の調査 第151—17次

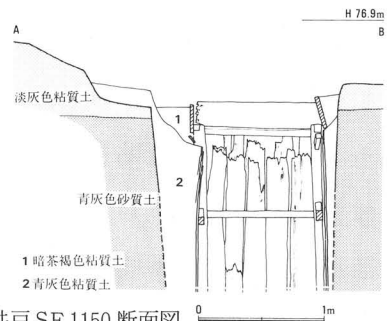
アパート建設に伴う事前調査である。層序は上から盛土、耕土、暗褐色粘質土（床土）、灰褐色砂質土、黄色粘質土、暗灰色粘質土、淡灰色粘質土（地山）の順となる。検出した主な遺構は南北溝1条、道路1条、井戸1基である。

西三坊大路西側溝SD1145は幅3.1m以上、深さ0.3mの素掘りの南北溝で、地山上に掘削されている。埋土は大きく2層に分かれ、下層の黄褐色砂質土から奈良時代の土器、瓦が少量出土した。今回西肩は検出し得なかったが、トレンチ西端での溝底の立ち上がりから推定して溝幅を3.5mと仮定すれば、溝心の座標はX=-145943.217、Y=-20204.675となる。西三坊大路SF1146は、路面に瓦片を含む厚さ約5cmの茶褐色バラス土が敷きつめられる。路面は北に向かって徐々に下がっており、トレンチの南北で約20cmの高低差がある。

井戸SE1150はSD1145の溝底に掘削されており、溝底から1.6m掘り下げたが崩壊の危険があったため完掘するに至らなかった。溝の埋土下層が井戸上面を覆うとともに溝の掘削で井戸が破壊された痕跡もなく、溝と同時期に機能し、溝の廃絶に先立って使用されなくなったものと推定される。一辺0.9mの方形縦板組井戸枠の上段に一辺約1.0mの横板井籠組井戸枠を2段以上組んだものである。縦板組井戸枠は一部2段になる掘形の西寄りに組む。隅柱は一辺11cmの角材を用いそれぞれ横棧でつなぐ。横棧は2段目まで確認した。縦板は幅約17cm、厚さ約1cmで一辺に5枚前後用いられる。横板井籠組井戸枠は縦板組井戸枠の最上段を撤去し作りかえたものである。横板は長さ約1.0m、幅約26cm、厚さ約3cmで、2段目は腐蝕してほとんどのこっていないかった。井戸内からは平瓦片が少量出土した。

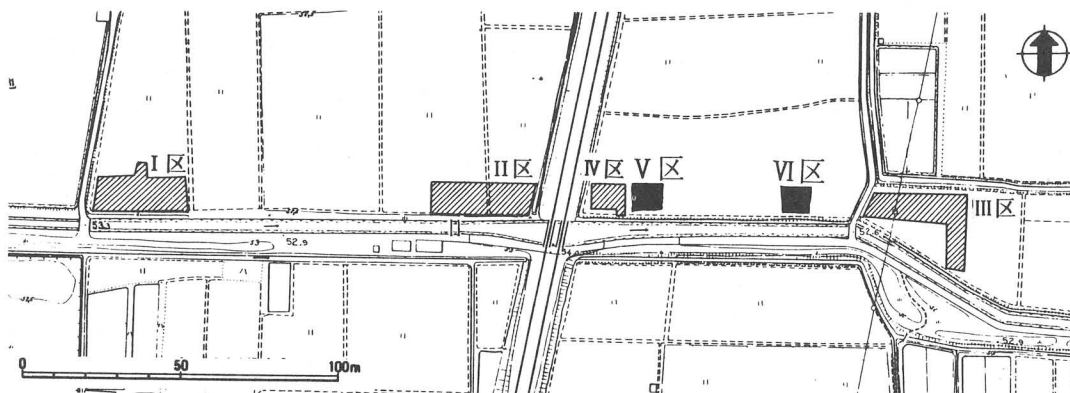


第25図 西三坊大路発掘遺構図



第26図 井戸SE1150断面図

9 右京九条大路の調査 第125—4次

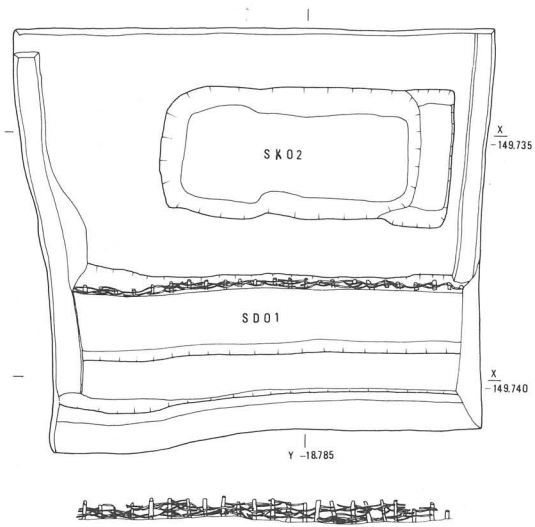


第27図 九条大路調査位置図

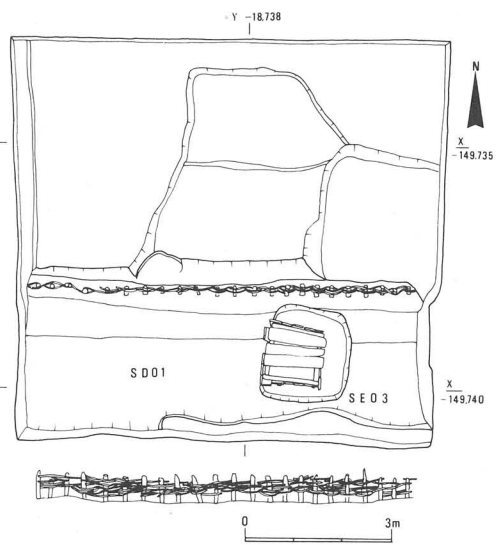
本調査は県道城廻り線建設に伴う昭和58年度調査である。昭和55年度に調査したIV区とIII区の間、V区とVI区を、各9×7mずつ設定した。

V区は昭和55年度調査のIV区より東へ2m離れる。九条大路北側溝SD 01と土壙SK 02を検出した。SD 01は北岸のみで南岸は検出していない。深さ0.7m。堆積土は暗灰粘質土。北岸をしがらみで護岸しており、杭の間隔は20～25cm。木器、土器が出土した。SD 01の上に堆積する厚さ0.8mの砂と粘質土の互層からは近世の遺物が出土しており、現在の蟹川が近世にはSD 01直上を流れていた。SK 02は、東西6m、南北2.8m、深さ0.5mの土壙で、埋土は木屑、炭、灰を混えた暗灰粘質土である。埋土から「廣萬侶鯨百連甲」「□上八十□」の墨書木簡、「田邊鯨六十連」の線刻木簡、平城宮Ⅱ期の土器、銅釘、曲物、槌の子が出土した。土壙は、京造宮時のごみを廃棄したものであろう。

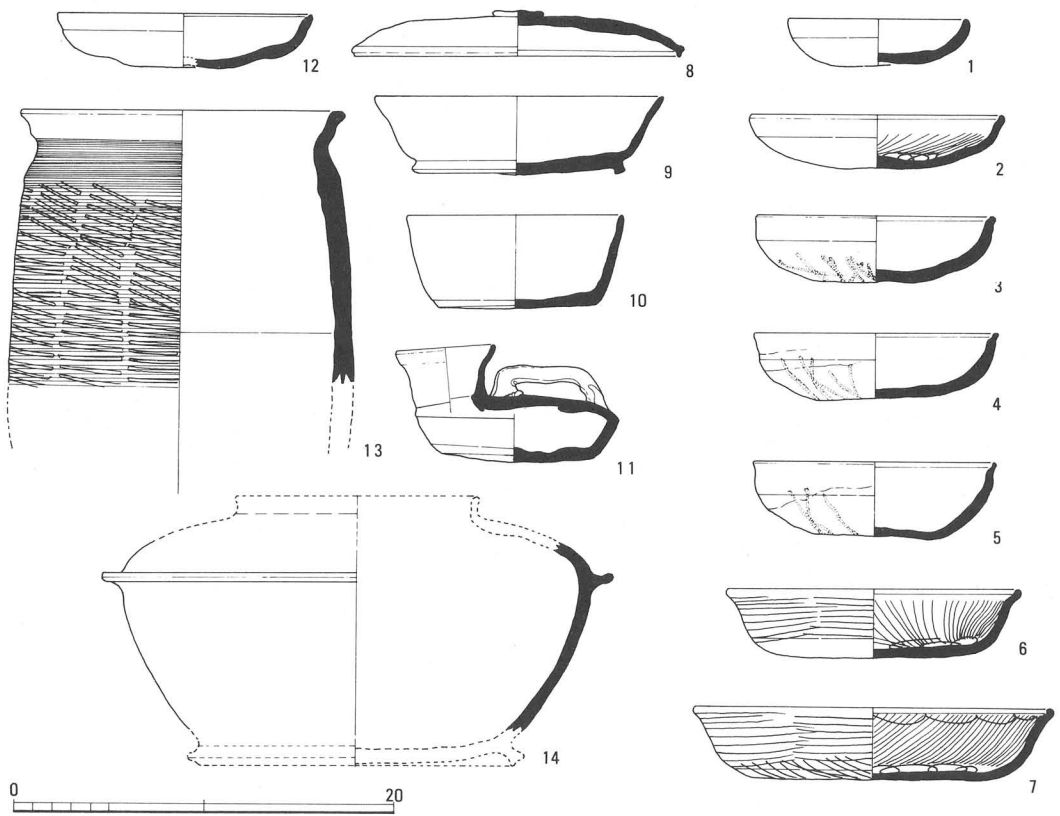
VI区は昭和55年度調査のIII区より西へ20m離れる。九条大路北側溝SD 01と近代の井戸SE 03を検出した。SD 01は、幅2.5m、深さ0.9mで、堆積土は下層が暗灰粘質土、上層が灰色砂。灰色砂の堆積幅は1.5m。北岸をしがらみで護岸する。堆積土の暗灰粘質土から「勝寶二年」の木簡、人形、曲物が出土した。SE 03は径1mの方形井戸で、縦板・横棧・隅柱を組み合わせる。隅柱は長さ30～40cm、径10cmの丸太を横棧の上下に置いただけのもの。釘の使用はない。



第28図 V区発掘遺構図



第29図 VI区発掘遺構図



第30図 SK 02 出土土器 (1~7・12土師器, 他は須恵器)